

政治って、面白い! —女性政治家24人が語る仕事のリアル

「政治家ってこんなにやりがいのある仕事なんだ」と思わせてくれる、魅力的な語り溢れた本である。本書に登場する24人の女性政治家(国会議員、地方議員、首長)のバックグラウンドや掲げる政策課題はさまざまだが、共通して目指すのは「政治のフェミニナイズーション(女性化)」である。男性中心の政界でハラスメントやケア責任との両立などの問題に直面しながら、既存の政治で周縁化されてきた女性や社会的弱者の声を代弁すべく日々奮闘する彼女たちの活動を知り、これまでの政治家に対するイメージがガラリと変わるに違いない。

昨年10月にムーブで開催された女性の政治参画推進講座では、9.11同時多発テロ直後の合衆国議会で、軍事力行使承認決議にただ一人反対したバーバラ・リー議員のドキュメンタリー映画が上映された。上映後の講演で、私は「リー議員のように弱者に寄り添い、自分の信念に忠実に行動できる政治家を私たち有権者が育てていく必要がある」と述べた。本書を読むと、彼女のような女性政治家がすでに日本各地に存在し、時には党派を超えて連携しながら「男性政治」に変革のうねりを起こしつつあるのを感じる。

本書を読んで政治に関心を持った人は、自分の「推し」の議員を見つけてその活動を支えるのもよし、実際に立候補して議員として社会変革を目指すのもよし。本書は政治を自分ごととして捉え直し、民主主義制度への参画方法を新たに模索するきっかけを与えてくれるだろう。

おくだ やすひろ
中部大学 人間力創成教育院 語学系嘱託講師 **岡田 泰弘**さん



- 三浦 まり 編著
- 花伝社
- 2023年初版
- 1,700円(税別)

政治のフェミニナイズーション(女性化)

権力志向で男性中心の政治制度を温存したまま女性議員の数を増やすのではなく、女性の視点から既存の政治組織や選挙文化を根本的に変えていくとする試み。育児や介護などのケアワークを伝統的に担ってきた女性の経験を政策提言に生かすことにより、「ケア」、「共生」、「包摂」といった価値観を政治の場で実現することが期待される。本書にも登場する岸本聡子杉並区長が提唱し、多くの女性政治家に共有されている視点である。

トランスジェンダー入門

脱出ゲームにハマったことのある人はいるだろうか?迷宮の扉を開けて一步入ると、そこは薄暗い部屋。「性のあり方という迷路をどう進めばいいのか」と途方に暮れたら、この本を開いてほしい。

まず、「トランスジェンダー(以下トランスと略記)を認めることで、『今日から自分は女です』と女風呂に入ってくる男が増えたら困る」と不安に思う人は、「第2章 性別移行」を熟読してほしい。ここでは「性別を変える」という過程を、①精神的移行、②社会的移行、③医学的移行の三つの角度から解説しており、誰が読んでも分かりやすい。世間では「性転換手術」のみが独り歩きしているが、実際は個人の精神的な気づきに始まり、周囲からの受容/拒絶と葛藤しながら、生きるためにホルモン療法や手術を選択するわけで、思いつきで性別を移行することはできない。「第3章 差別」の終わりにある突出した自殺意識調査と合わせて読むと、周囲の受容/拒絶が、トランスの命を左右する状況が伝わってくる。

一方、本誌の読者に注目してほしいのは「第6章 フェミニズムと男性学」だ。ここではトランスの望む世界と、フェミニズムが目指す社会に向けた協働の形が垣間見える。中でもこれまで無視されがちだった「ノンバイナリーの政治」には元気をもらった。

これまで長らく「男か女か」「敵か味方か」という過剰な二項対立と序列化によって多様性を消し去り、社会秩序をなんとか保ってきたわけだが、そろそろこの迷宮から脱出して、新たな地平を共に開きたい…そんな光が射し込んできた気がした。

はら た
共生社会をつくる性的マイノリティ支援全国ネットワーク 共同代表理事 **原 ミナ汰**さん



- 周司 あきら、高井 ゆと里 著
- 集英社
- 2023年初版
- 960円(税別)

ノンバイナリー

「この世には男と女しかない」というのは極論で、すべての人が自身を男性、もしくは女性と認識しているわけではない。「女か男か」という二者択一の選択がしづらぬ人、局面によって性別が切り替わる人、そもそも「性はひとつ」と捉える人などの総称をノンバイナリーと呼ぶ。近年の調査では、男女どちらかにアイデンティティが固定されたバイナリー・トランスと、男女別アイデンティティをもたないノンバイナリー・トランスに分けて統計をとる傾向がある。

妊娠を知られたくない女性たち —「内密出産」の理由

妊娠は必ずしも喜ばしい出来事とは限らない。望まない妊娠や周囲から受け入れられない妊娠を誰にも打ち明けられずにいる、また知られたくない女性たちも少なくない。本書は、2022年に国が「内密出産」に関するガイドラインを発出した背景を踏まえ、妊娠出産に悩む女性たちを取り巻く現状や課題、ドイツでの支援制度、そして内密出産を制度化するために必要な取り組み等を支援者の視点から説明している。

日本では、個人情報や明らかにしなければ医療機関での出産や支援制度を利用できない。妊娠を他者に知られてしまうことを恐れ、未受診のまま孤立出産へと追い込まれてしまう現実がある。各自治体や民間機関が独自で相談対応をしているが、自己負担なしで誰にも知られずに出産するには、慈恵病院が行っている内密出産や「赤ちゃんポスト」を利用するしかない。

しかし、多くの外国人女性はそのような支援にたどり着くことさえもできずにいる。相談窓口が、外国人女性からの相談を想定した体制になっていないからだ。支援にたどり着けずに孤立出産となる外国人技能実習生が後を絶たない現状を考えると、日本の支援現場は包摂的な視点に欠けていると感じるのが正直なところだ。支援制度を進めていく中で外国人女性たちの存在も当たり前のように含むことを切に願いつつ、周囲に知られることなく産む権利を保障するための公費での制度を考える上で、必要な基礎知識として本書を薦めたい。

コムスター外国人と共に生きる会 事務局長 さくま よりこ **佐久間 順子**さん



- 佐藤 拓代、松岡 典子、松尾 みさき、赤尾 さく美 著
- 日本看護協会出版会
- 2023年初版
- 900円(税別)

内密出産

女性が医療機関のみに身元を明かして出産する仕組み。周囲に知られることなく産むという選択肢を設けることで、孤立出産を回避し新生児の命を守ることを目的としており、現在日本では熊本市の慈恵病院のみで行われている。匿名出産とは違い、医療機関が母親の情報を保管しておき、子が一定の年齢になった時に知らせることで、子の「出自を知る権利」を守っている。しかし、現在は法制度が整っていないまま実施されている状態だ。

作りたい女と食べたい女 1~4巻

神戸大学 国際文化学研究所 講師 なかむら あさみ **中村 麻美**さん

作りたい。食べたい。シンプルな欲望のように思えるが、食にジェンダー役割や家族にまつわる規範が入り込んでくると、とたんにややこしくなってしまう。残さず食べる、でも食べすぎると、会食の場で食べないのは失礼、女は料理ができて当たり前、食は身近だからこそ、「こうでなければならない」という圧を引き寄せがちだ。他にも、量少なめや野菜多めの定食がなぜか「レディースセット」と呼ばれているのを目にするし、「スイーツ男子」という言葉も記憶に新しい。本作品では二人の女性(野本さんと春日さん)が、社会から押し付けられる偏見や差別一例えば「家族愛」という名の相互扶助の強制、賃金格差、住まい探しにおける差別一に抗いながら、自身の欲望を取り戻し、他者との親密性を探る姿が丹念に描かれており、表題が『作りたい女と食べたい女』なもうなずける。

とはいえシリアスな内容ばかりというわけではなく、心温まるエピソードや、料理のアイデアが豊富だ。紹介されるレシピの材料はコンビニで手に入るものが多く、気負わない料理が提示されている。主要登場人物らの二人の友人、矢子さんと南雲さんも物語の鍵を握る。矢子さんは自炊に消極的で、総菜やレトルトを楽しむ一方、南雲さんは会食恐怖症を抱えている。このよう

- ゆざき さかおみ 著
- KADOKAWA
- 2021年より刊行
- 700円(税別)



に、物語中には作りたいくない、あるいは食べたくない、というニーズも反映されているのだ。ちなみに矢子さんは女性を恋愛対象とするが、他者に性的に惹かれられないアセクシュアルでもある。異性愛規範だけでなく、広く性愛に関する規範が問われている。連載、そしてNHKでのドラマ版も継続中の「つくたべ」。女性を愛する女性、というモチーフ以上に、他者を尊重するとはどうということかについて考えさせてくれる漫画だ。